

報告1／「タイの政治混乱 —その歴史的 position—」

重富 真一（しげとみ しんいち）
アジア経済研究所 地域研究センター
東南アジア I 研究グループ長

はじめに

昨今、タイが非常に騒がしく、大きなニュースになることが多い。日本人ジャーナリストも亡くなっており、最近インターネットで銃撃戦のような生々しい映像も多数流れている。このタイの政治混乱は、突然出てきたようにも見えるが、歴史的な長いパースペクティブで位置付けてみた方が良いのではないかと、今日お話しする。まず最初に、現在起きている混乱の構図についてお話しする。

1. 最近のタイにおける混乱

タイでは2001年から2006年ごろまで首相を務めたタクシン氏を支持する人たちがおり、反独裁民主主義戦線（UDD）というグループが運動のリーダーシップを取っている。シンボル・カラーは赤で、支持層は専ら農村や都市の下層の人たちだ。特に農村の住民は、全体的に下層の人たちが多い。議会においてはタイ貢献（プアタイ）党が、こちらの勢力に属し、現在は野党になっている。

一方で、タクシンが首相だったころから、彼に反対していたグループがあり、その中心には民主主義のための人民連合（PAD）という団体がある。シンボル・カラーは黄色で、支持者には、中間層や上層の人が多くといわれる。議会では現在、与党の民主党を支持している人が多い。PADも最近政党を作ったのだが、まだ議席を持っていない。

タクシンは2001年に初めて当選し、非常に人気があって任期満了まで務めた。そして2005年の総選挙では、その政党が3分の2ほどの議席を取った。しかし、2005年末から2006年初めにかけて、反タクシン派の「タクシンは出ていけ」という街頭行動が激しくなった。街頭行動があまりにも激しくなったので、タクシンは解散・総選挙で真意を問うという方法を選んだ。ところが、野党はボイコットし、「選挙は無効」という裁判所の判決が出た。こうして政権が宙に浮いたところで、2006年9月にクーデターがあった。タクシンはこのとき外国おり、国には戻れず、タクシン政権は崩壊した。

クーデターを起こした人たちは、反タクシン派の政権を作ったが、いつまでも正当性の

ない政権を続ける訳にはいかないので、1年後に選挙を行った。しかし選挙ではタクシン派の政党が勝利し、タクシン派の政権ができる。反タクシン派は不満なので、再び街頭行動を起こし、首相府を何ヵ月も占拠した上、国際空港も数日間占拠して、国際的な玄関口を完全に塞いでしまった。その最中、裁判所はタクシン派政権党の選挙違反を理由に、解党を命じ、タクシン派政権は崩壊する。タクシン派は新たな政党を作り、連立工作をしていたが、タクシン派の一部議員が反タクシン派に寝返り、反タクシン派が多数派となって現在の民主党政権ができた。この時、タクシン派の分裂にてこ入れをしたのは軍だといわれているので、そのような政権には「正当性がない」ということから、今度はタクシン派が街頭行動に出ているのが現在の状況だ。これが過去5年ほどの動きである。

2. 軍事政権から政治改革の時代

もう少し、長いスパンでタイの戦後政治史を見ると、1973年までは軍部による権威主義の政治が行われていた。終戦後から1973年までの間、政党が許されたのは半分ぐらいで、選挙も6回しか実施されなかった。また選挙が行われても、軍側は気に入らない政権や政治になると、クーデターでつぶし、作り直すことを続けていた。しかし1973年に学生による民主化運動が起き、集会する学生に対して軍が発砲、かなりの参加者が死亡する事件があった。これは、10月14日事件といわれている。結局は国王が首相等に退任を求め、軍部による政権が崩壊した。

1976年までは政党による政治が復活していたが、次第に右派が力を取り戻し、再度、学生の民主化運動に発展した。そして再び軍が発砲し、かなりの学生が亡くなっている。1976年10月6日に起こったので、10月6日事件といわれる。その後は強権政治が復活し、学生のリーダーや、同じころに組織化がなされた農民運動のリーダーらは森へ逃げ、森の中でタイ共産党に合流した。彼らは森を基盤にゲリラ活動を行い、東北タイなどを中心に軍と抗争を続けた。

しかし、軍の側が反政府勢力への強硬措置だけではいつまで経っても国が治まらないうと気づいた。軍のリーダーが、もともと自分たちで立てた右派政権に対しクーデターを起こした。軍側は政治のあり方を変えようとし、力で共産主義勢力を抑えようとしても治まらないので、農村の貧困をなくすという方法でやらなければだめだというアイデアが出てきた。これを推進したのは、1981年から88年まで8年にも亘って首相に在任したプレームという人物だ。1980年代はまさにプレームの時代である。プレームは陸軍のトップ、国軍最高司令官を務めた後、首相になった。プレームが首相を務めた時期には政党の活動が認められ、選挙も行われた。政党が選挙で競い合い、多数を取った政党が、他の政党と連立を組むのだが、首相になるのはトップの政党の党首ではなく、プレームだった。当時の憲法では選挙に立候補していない人も首相になれたので、プレームが首相になっていた。プレームが首相になった後も何度か選挙はあったが、その都度、連立与党がプレームに首相

を続けるよう求め、プレームの首相への在任が続いた。つまり首相は選挙による承認を得ていないのだが、政党はあり選挙も行われていた。プレームは、かなり官僚を重用した政策を取り、また背後には軍の支持があった。そしてプレームは、国王の信任も得ていた。このように、プレームの時期は、「半分の民主主義」といわれる。それ以前の状態から考えれば、軍の主導で半分だけ民主化したというのが1980年代だと考えられる。

プレームは1988年に引退して、その後はいよいよ「半分」ではなく「全面の」民主主義になり、政党政治家による政治が始まった。そして、選挙で第一党になった政党の党首が首相に就任したが、新しい政権は汚職がひどく、「ビュッフエ（つまみ食い）・キャビネット」と揶揄された。1991年には軍側が再びクーデターを起こし、政権を崩壊させた。軍の言い分は、「汚職のひどい政治はだめだ。もう少し清潔な政治に戻さなければいけない」というもので、クーデターは当初、国民に歓迎された。

しかし翌年、クーデター的首謀者自身が首相になると、国民は反発し、5月には数十万人の市民が集まって、元軍人の首相に辞職を迫った。このときも軍側が群集に発砲し、かなりの人が亡くなった。1970年代の民主化運動では、学生が中心だったが、1992年に集まった人たちの中心は学生ではなく、都市の中間層だった。当時は携帯電話がまだ高価で、都市の中間層ぐらいしか持てなかったため、「携帯電話の群衆」といわれた。彼らは携帯電話で仲間を呼んだり、「今、こんなことが起きている」と連絡したりした。テレビなどは政府によってコントロールされているためだった。

軍と市民の衝突が起きると、王様が集会リーダーと首相を呼びつけ、訓戒を垂れた。首相は辞任し、軍は政治の表舞台から後退せざるを得なかった。人々は、軍による政治に戻ることはとんでもないと考えたが、一方では政党による政治も汚職などがあって必ずしも良くない。したがって軍による政治でもなく、また政党政治家もコントロールしなくてはいけないわけで、タイの政治は根本的に改めなければならない、ということになった。こうして1990年代は、「政治改革」の時代となった。

改革をするのだから何が良い政治なのかを考えなくてはならない。できるだけ民衆が参加する政治にしなければならないが、政治家による政治では政治家が民衆の意思を代表していない、と政治改革を主導した人たちは考えた。なぜなら、政治家は選挙区で、票をお金で買うことで選ばれているからだという。逆に言えば、農村の農民らはお金を渡されるとすぐにそこへ投票してしまう人が多いということである。そこには、民衆に対する一種の愚民感があった。したがって、このように出てくる政治家をコントロールする仕組みが必要という訳だ。

では、どのように政治家をコントロールするのだが、まず、選挙違反をかなり厳しく取り締まった。選挙違反の疑いがあると選挙管理委員会が「イエロー・カード」や「レッド・カード」を出し、選挙はやり直しになった。下院は選挙区選出議員と比例代表議員とからなるのだが、選挙区選出の議員は閣僚になりにくいようにした。選挙区から出てくる議員はろくな議員でない、そういう人が閣僚になれば権限を使って汚職をするので、閣僚にな

らないようにすれば良いという考え方による。そうすると閣僚は、比例代表から選ばれることになる。比例代表で選ばれるのは、政党の推薦リストから選ばれる立派な人たちだ。また候補者に学歴要件を設け、大学卒以上でなければ立候補できないことになった。大学卒の方が立派だという考えには首をかしげたくなるが、そのころタイでは多くの人がそう思っていた。もう 1 つは、選挙区を小選挙区制に変えたことだ。小選挙区制では政党間の競い合いになるので、政治家個人の力よりも政党のコントロールが効きやすいのだろう。一方、上院議員も選挙で選ぶようにした。上院は下院のお目付役だから、上院議員の選挙では、非常に選挙違反がやりにくい特殊な方法をとった。つまり、選挙運動をしてはいけない、自己紹介だけしなさいとした。その他、政府を監視する独立した機関を、いくつか新たに設置した。

新しい制度作りは、政治家に任せるとろくなものがないということで、進歩的な知識人、公務員、社会活動家などが運動の中心メンバーとなった。私は彼らを、「ニュー・エリート」と呼んでいる。例えば、一番のリーダーになり、政治改革で中心的なアイデアを出した人はプラウェート・ワシーという国立病院の医者だ。彼は NGO の活動もやり、非常に尊敬されていた。こういった政治家ではない人たちを集め、新しい仕組みを考える委員会のトップに据えた。また憲法起草の過程では、市民による直接参加型の公聴会を開いた。さらに選挙監視のボランティア組織ができ、地方の公務員や知識人層が参加した。

このように 1990 年代には、社会意識の高い中間層が参加して政治改革を行った。総仕上げとなったのが 1997 年に制定された憲法で、彼らはそれを「民衆版憲法」と呼んだ。ニュー・エリートという立派な、見識の高い方々が、良からぬ政治家をしっかりとコントロールしようとして作ったものである。

こうした「良き人たちの政治」という考え方の背後には、一種の特殊なタイのコミュニティ主義がある。元は 1980 年代初めごろ、農村開発をしていた NGO がこれを考え始めた。彼らはそれまで民衆を、馬鹿で貧しく、しかも不健康だという認識で見ている。しかし、農村住民の中にも実はそれなりの論理があり、その論理は尊重されなければならない、そうでなければ参加型の開発はしっかりできないという考え方が出てきた。つまり、それまでマイナスに見ていたものをプラスに転換するような考で、1980 年代後半から、1 つの思想として、多様な形に分化していく。

思想分化の 1 つ目は、民衆の文化を「タイの純粋な文化」と翼賛していく、ある意味でナショナリズムに結び付くような考えだ。2 つ目は、民衆文化を支えているコミュニティを基盤に、市民社会を作っていくという考えだ。さらに 3 つ目として、民衆が自ら地域の資源を管理すべきだという民衆の権利論に結び付いていく。この中で 2 つめの「市民社会」を強調する流れでは、コミュニティの中から良い人を選び、彼等がさらに上の組織を作り、またその中から良い人を選ぶという具合にすれば、次第に良い人が集まり、一番上は良い政府になるという。このアイデアを提示したプラウェート・ワシーは、こうした階層づけられたコミュニティの上に、無謬の国王が鎮座するという社会のイメージを描いている。

3. タクシンの登場、中間層の反発

しかし、これはあくまで理想で、実際には選挙で代表を選ばなければならない。2001年には1997年の民衆版憲法に基づく最初の下院選挙があったのだが、タクシンに率いられた新政党であるタイラクタイ党が圧勝した。タクシンの戦術は、今でいうマニフェスト選挙で、農村住民が裨益するような、具体的な政策を掲げて戦った。タクシンは多くの票を獲得し、政権発足後まもなく、これらの政策を実現した。そして任期満了を迎えた2005年の選挙でも、圧勝した。

タクシンの掲げた政策は例えば、30 バーツ（約100円）を出せば、誰でも医療が受けられるというものだった。これは農村の人たちにとって非常にありがたい政策だった。タクシンは結局、農村票や下層票に狙いを定めた訳で、それらの人たちは数が多いので、勝てるということだった。それまでの政党は票を金で買っていたのだが、政策で票を集めた。農村住民にとっては、選挙が自分たちに利益をもたらす政権を選ぶ機会となった。また小選挙区制になっていたのも、なおさらだった。以前は票を金で買う「数の政治」であったのかもしれないが、タクシンは異なった意味で「数の政治」を進めようとした。そして、結果的に下層の人たちを政治的に覚醒させて、エンパワーメントした。

しかし、数の少ない中間層にとっては、ディス・エンパワーメントを意味した。タクシン政権は圧倒的な力を持ち、2期目には3分の2の議席を占めていたが、その力を背景に好き勝手なことをするようになった。タクシンは、例えば自分の息がかかった人物を選挙管理委員会の委員にし、軍では親戚を出世させ、自分に批判的なメディアには広告を出さないよう企業に要求するなどした。このようなタクシンの政治姿勢に反発したのは、やはり中間層、知識人層だった。特に言論弾圧は知識人層にとって許せないことで、身内びいき、汚職もそうだった。しかもタクシンは次第に力を付け、傲慢になった。従来タイでは農村へ行って大歓迎されるのは王様や王室だけだったが、タクシンが行っても同様に大歓迎されるようになり、王室との関係も悪くなっていった。「数の政治」をするタクシンが、2006年ごろからニュー・エリートにとって望ましくない存在になっていった。

1990年代には「我々の時代」と思っていた中間層は、政治改革の結果として突然、タクシンが出てきて、ディス・エンパワーメントされることになった。そして彼らは選挙では勝てないため、街頭行動を行った。その際、王様の権威を使い、王様の誕生日の色である黄色をシンボル・カラーとし、「タクシンが王様をないがしろにしている」と主張した。さらに彼等が告訴をすると司法がタクシン側に不利な判決を出す。最後には軍がクーデターを起こし、民主化を進めていたはずの中間層が、軍のクーデターを歓迎することになった。

そこで中間層の人たちは自分たちの「民主主義」を定義しなくてはならない。黄色側の運動体であるPADは、選挙による政治ではろくな人間が出てこないから、良い人による政治を行わねばならない。そのためには、選挙によらない代表も政治に参加することが必要

だとした。彼らは議会の 7 割を、選挙区の選挙で選ばれた人ではない人にするよう主張した。それが真の立憲王制だと言う。

一方、タクシン派は、反タクシン側の政権になったときに集会を開き、「我々は下層だ」と言って、下層が戦っていることを意識させる手法を使っていた。そして相手側が「良い人による政治」を主張しているのを、それに攻撃を加えていた。集会では、地面に反タクシン側のリーダー的な人たちの写真を貼り付け、集会参加者が足で踏み付ける場面も見られた。この中には、プルーム元首相の写真も入っていた。彼は王室に非常に近く、引退後は枢密院の議長を務めてきた。タクシンに対するクーデターでも背後にいたといわれ、国民の尊敬を受けている。良い人の代表格はもちろん王様なのだが、それに次いで立派な良い人というのはプルームだ。そのプルームを標的にしたのである。同様に、黄色側がいう「良い人」のことを、赤側は「エリート」と言い換え、自分たちは隷属民という意味の「プライ」という言葉で表現していた。このようにして、自分たちのアイデンティティを強調した。タクシンは、反タクシンの運動が盛り上がったときに「私には選挙で 1600 万票の支持がある」と言っていたが、下層の人達は民衆に権力を返し、解散総選挙をするよう求めている。このように、中間層が「良い人の政治」を求めているのに対し、下層の人たちは「数で決着を付ける」と言って対抗している。

4. 民主主義発展の一段階としての混乱

タイでは 1973 年までは軍による独裁政治が続き、1973 年から 76 年ごろの間に変化した。学生が民主化運動をし、旧勢力が弾圧をかけて死者も出た。1980 年代には、軍が民主化を半分進めた。それが終わり、全面の民主主義に変わるとき、やはり軍がもう一度、反発し、事件が起き、再び死者が出た。ようやく治まって、1990 年代になるとニュー・エリートが民主化を進めた。そして新しい憲法の下で選挙をしたところ、タクシンが登場し、「数の政治」を再構成した。現在のタイの政治は、「良き人の政治」と「数の政治」がぶつかっている状態だ。

タイの政治は、最初の軍部による独裁政権から「半分の民主主義」になり、ニュー・エリートが出てきて、下層の人達もようやく自らの投票が政治的な力を持つことを理解するようになった。つまり政治への参加者が拡大しており、混乱のように見えるが、私は民主主義の発展の一段階だと思う。民主主義が発展する段階には、常にこういった混乱が起きるので、我々は現在、それを目撃しているのだと思う。

「質の政治」と「数の政治」という、いわばゲームのルールに関する対立があり、混乱を長引かせている。政策的に見ると、タクシンはかなりポピュリスト的な政策を行ったが、タクシン以後の政権は皆、同様にポピュリスト的な政策をしている。したがって、政策内容では今や、あまり大きな違いはない。また階層対立といわれるが、近年急に階層の格差が拡大したとは思えない。しかし、なぜ「タクシン、タクシン」と騒ぐのかというと、や

はりタクシンは最初に、下層が裨益するポピュリスト的な政策を行ったためだろう。タクシン・ブランドは現在も、かなり効いている。しかし、ブランドというのは、他にも良いものが出てくると次第に忘れられるものなので、それほど長くは続かないのではないか。

一方、王室については、現在の王様は開発の過程で様々な援助の活動を続けてきたほか、政治の様々な節目で登場し、安定させる役割を果たしてきた。このため、非常に政治的カリスマ性が高まっている。黄色側はこのカリスマ性を使って、タクシンを追い落とそうとしたが、王様が政治的に使われた形になってしまった。農村の人たちはタクシンの政策が好きなので、それでも言うことを聞かない。逆に王室の権威は傷ついてしまって、今では王室に対する批判的な言葉が民衆の間でも出ている。カリスマ性を高めたがゆえに、政治に巻き込まれて、これまでのような政治安定化機能を果たせなくなっている。

(以上)

※敬称略／役職等は報告当時のものです。

※固有名詞等の表記は、報告者によって異なる場合があります。